外交拠点としての難波と筑紫

Naniwa and Chikushi as Hubs of Diplomacy

仁藤敦史
NITO Atsushi

はじめに

①孝徳期の外交構調
②孝徳期の外交的対立
③孝徳期の難波還都

おわりに

【論文要旨】

難波は古代都城の歴史において外交・交通・交易などの拠点となり、周辺として機能していた。外交路線の対立（陳政）により蘇我氏の滅亡が遂のような、難波有極天智宮（前期難波宮）が大都などを改造して造られた。先進的な大規模朝堂院空間を有しながら、孝徳期の難波還都から半世紀の間は同様な施設が飛鳥や近江に確認されない点がこれまで大きな疑問とされてきた。藤原宮の朝堂院までは、こうした施設は飛鳥に造られず、この間に外交使節の飛鳥への入京が途絶える。これに対し、藤原宮の大極殿・朝堂の完成とともに外国使節が飛鳥へ入京することになったことは表裏の関係にあると考えられる。こうした問題関係から、筑紫の小郡・大郡とともに、難波の施設は、唐・新羅に対する外交的拠点として重視されたことを論じた。

前提として、古人大兄「講史」事件の処理や唐朝国司の再審査などの分析により、孝徳期の外交路線が隋唐帝国の出現により分裂的であり、中大兄・吉明（親百済）と孝徳・蘇我石川麻吕（親唐・新羅）という対立関係にあることを論証した。律令制下の都城中極に前代的要素の併用を紛合であるとすれば、日常政務・節会・即位・外交・服部などの施設が統合されて大極殿・朝堂区画が藤原京段階で一応の完成を果たしたとの見通しができる。難波宮の巨大朝堂区画は通説のように日常の政務・儀礼空間というより、外交儀礼の場に特化して早熟的に発展したため、エピソード部や飛鳥寺の広場などと相互補完的に機能し、大津宮や浄御原宮には朝堂空間としては直接継承されなかったと考えられる。藤原宮の朝堂・大極殿は、7世紀において飛鳥寺の広場や難波宮宮堂（難波大郡・小郡・難波館）さらには筑紫大郡・小郡・筑紫館などで分節的に果たしていた服部儀礼・外交儀礼・神事・即位などの役割を兼務したものであると結論した。

【キーワード】前期難波宮、朝堂院、難波還都、外交、唐帝国